

しんぱん
新版

しどうようもんしゅう
指導要文集

だいいっしょう

第一章

しんじん

信心の基本

きほん

しんこうしや

信仰者の姿勢

しせい

ほうもん

じやせい

糾

りこん

つうりき

依

ただ法門をもつて邪正をただすべし。利根と通力とにはよ

るべからず。

しょうほっけだいもくしょう

001 唱法華題目抄

しんこうしゃ

しせい

信仰者の姿勢 23 ページー 13 行

ほうり

せいじや

あき

りこん

ただし法理によつて正邪は明らかにしていくべきであつて、利根

かんきよう

たい

さよう

お

のうりよく

じんりき

はんでい

（環境に対して作用を起こしていく能力）や神力によつて判定

してはなりません。

この経を釈して云わく「浅きは易く深きは難しとは、
釈迦の所判なり。浅きを去つて深きに就くは、丈夫の心
なり。」

（009 撰時抄）

信仰者の姿勢 182 ページ 3 行

この経文を（伝教大師が）釈していうのには、「浅きは易く
深きは難しとは釈尊の説く立て分けであり、浅きを去つて深きに
就くのは丈夫（調御丈夫と呼ばれる釈尊のこと）の心である」
とあります。

おうち　う　み　したが
王地に生まれたれば身をば随えられたてまつるようなり
こころ　したが
とも、心をば随えられたてまつるべからず。

（
009 撰時抄
せんじしやう

しんこうしや　しせい
信仰者の姿勢
204 ページー15 行

ほけきよう ほ かえ ほつけ ところ ところ とう

「法華經を讃むといえども、還つて法華の心を死す」等

うんぬん

思

ほけきよう

読

さんたん

云々。これらをもつておもうに、法華經をよみ讃歎する

ひとびと

なか

むけんじごく

おお

あ

人々の中に、無間地獄は多く有るなり。

かじよう

じおん

いちじようひぼう

ひと

嘉祥・慈恩すでに一乗誹謗の人ぞかし。

ほうおんしやう

(010 報恩抄

しんこうしや しせい

信仰者の姿勢 241 ページー13 行)

でんぎやうだいし

ほつけしゆうく

ほけきよう

ほ

(伝教大師の「法華秀句」に)「法華經を讃めるといえども、か

ほけきよう

ところ

ところ

おも

えつて法華經の心を死す」とあります。これをとおして思うこと

ほけきよう

よ

ほけきよう

さんたん

ひと

は、むしろ法華經を読み法華經を讃嘆する人びとのなかに、かえつて

むげんじごく

ひと おお

ちゅうごく

かじようだいし

無間地獄におちる人が多くあるということです。中国の嘉祥大師

ひと

ほけきよう

いちおう

という人びとは、法華經を一往はたたえているようですが、じつにす

ほっけいちじよう

ひぼう

ひと

でに法華一乗を誹謗する人たちなのです。

ゆえ 故に、みようほう 妙法と唱え蓮華と読まん時は、と な れんげ よ 我が一念を指して
みようほうれんげきよう な 妙法蓮華経と名づくるぞと深く信心を發すふか しんじん おこべきなり。

015 一生成仏抄

いっしょうじようぶつしやう

しんこうしや しせい 信仰者の姿勢 316 ページ 16 行

すべて一代八万の聖教、三世十方の諸の仏菩薩も、我

いちだいはいちまん

しょうぎよう

さんぜじつぽう

もろもろ

ぶつぼさつ

わ

が心の外に有りとはゆめゆめ思いうべからず。しかれば、

ぶつきよう

なら

しんしょう

かん

まった

しょうじ

仏教を習うといえども、心性を觀ぜざれば、全く生死

はな

しんげ

どう

もと

まんぎようまんぜん

を離るることなきなり。もし心外に道を求めて万行万善

しゅ

たと

びんぐ

ひと

にちや

となり

たから

かぞ

を修せんは、譬えば、貧窮の人、日夜に隣の財を計えた

はんせん

とくぶん

れども、半銭の得分もなきがごとし。

てんだい

しやく

なか

こころ

かん

しかれば、天台の釈の中には「もし心を觀ぜざれば、

じゅうざいめつ

こころ

かん

むりよう

くぎよう

重罪滅せず」とて、もし心を觀ぜざれば、無量の苦行と

はん

ゆえ

ひと

ぶつぽう

かく

なると判ぜり。故に、かくのごときの人をば、「仏法を学

げどう

して外道となる」はと恥じしめられたり。ここをもつて、

しかん

ぶつきよう がく

止観には「仏教を学すといえども、還つて外見に同ず」

しゃく

と釈せり。

015 一生成仏抄

いっしょうじょうぶつしやう

しんこうしや しせい

信仰者の姿勢 317 ページ 1 行

ぶつきよう おし

あらゆる仏教の教えも、そしてそこに説かれているすべての仏

ぼさつ じぶん せいめい ほか

とくべつ

や菩薩も自分の生命の外にある特別なものであるとは、けつして

かんが

考えてはなりません。そうであるから、いくら仏教を習うといつ

じぶん せいめい ぶっかい

しん

ても、自分の生命に仏界がそなわっていることを信じなければ、

と

ほとけ

ぶつきよう なら

しょうろうびようし

じんせい　くのう

生老病死という人生の苦悩からのがれることはできません。もし

じぶん　せいめい　ほか

くのう

みち

自分の生命の外のところで、苦悩からはなれる道をもとめてあらゆ

しゅぎよう

おこな

まず

ひと

る修行やよいことを行つたとしても、それは貧しい人が、

いちにちじゅう

となり

いえ

ざいさん

かんじよう

はんせん

一日中、隣の家を財産を勘定しても、半銭のもうけにもなら

おな

かち

みようらくだいし

ないのと同じで、価値のないことなのです。そのことを妙楽大師が

しかんぶぎようでんぐけつ

せいめい

かん

こんぼん

さと

「止観輔行伝弘決」のなかで「もし生命を觀じて、その根本を悟ら

かこせ

おも

つみ

け

なければ、過去世からの重い罪を消すことはできない」といつて、

じぶん　せいめい　かん

こんぼん

さと

しゅぎよう

自分の生命を觀じてその根本を悟らなければ、その修行はかえつ

おお

くる

おし

ひと

て大きな苦しみとなることを教えています。だからこのような人

じぶん

ぶつぽう

まな

げどう

は、自分では仏法を学んでいるつもりでも、じつさいには外道

ぶつぽういがい

おし

まな

は

（仏法以外の教え）を学んでいることになる、恥ずかしいことと

てんだいだいし

まかしかん

されているのです。それゆえに天台大師は「摩訶止観」のなかで

ぶつきよう

まな

げどう

かんが

かた

「仏教を学ぶといっても、かえって外道の考え方におちている」

といっているのです。

なんじほとけ

おも

まん

幢

ただすべからく汝仏にならんと思わば、慢のはたほこを

倒

いか

つえ

捨

いちじよう

き

たおし、忿りの杖をすてて、ひとえに一乗に帰すべし。

みようもんみようり

こんじよう

飾

がまんへんしゆう

ごしよう

絆

名聞名利は今生のかざり、我慢偏執は後生のほだしな

り。

(030 持妙法華問答抄

じみようほつけもんどうしよう

しんこうしや

しせい

信仰者の姿勢

513 ページー5 行)

じようぶつ

おも

まんしん

あなたが成仏したいと思うならば、ひたする慢心のはたほこ

こばた

やり

たお

いか

つえ

す

(小旗のついた槍のようなもの)を倒し、怒りの杖を捨てて、

いちぶつじよう

みようほう

なんみようほうれんげきよう

しん

みようもん

一仏乗の妙法 (南無妙法蓮華經) を信ずるべきです。名聞

みょうり　こんじょう　かざ　が　は　へんけん　もの

名利は今生の飾りであつて、我を張り、偏見（かたよつた物の

みかた　しゅうちやく　こころ　ごしようぼだい　じょうぶつ　あし

見方）に執着する心は後生菩提（成仏）の足かせになつてい

まいます。

ほう よ にん よ
「法に依つて人に依らざれ。義に依つて語に依らざれ。智
よ しき よ りようぎきよう よ ふりようぎきよう よ
に依つて識に依らざれ。了義經に依つて不了義經に依ら
ざれ」

048 法華初心成仏抄

しんこうしや しせい
信仰者の姿勢 686 ページ 8 行

ほとけ と きようもん
「仏の説いた經文によるべきであつて、人師・論師によつては
じようじゅうふへん ほとけ じつぎ
ならない、常住不變の仏の実義によるべきであつて、人師・論師

ことば ほとけ ちえ
の言葉によつてはならない。仏の智慧によるべきであつて、人師・

ろんし ことば りようぎきよう ほとけ しんじつ おし
論師の言葉によつてはならない。了義經（仏の眞実の教え）によ

ふりようぎきよう

ほうべん

おし

ほう

と

るべきであつて、不了義經（方便の教え）によつて法を説いてはな

ねはんぎよう

らない」（涅槃經）

くかい しゅじょう 九界の衆生は、いちねん むみょう 一念の無明の眠りの中において、しょうじ 生死の
ゆめ おぼ ほんかく うつつ わす ゆめ ぜ ひ しゅう くら 夢に溺れて本覺の寤を忘れ、夢の是非に執して冥きより
くら 冥きに入る。

049 三世諸仏總勘文教相廃立（總勘文抄）

さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう

そうかんもんしょう

しんこうしゃ しせい

信仰者の姿勢 708 ページ 7 行

いた
痛ましいかな、かな悲しいかな、まつだい末代の学者、がくしや仏法を習学し
かえて還つてぶつぽう仏法を滅す。めつ

049 三世諸仏總勘文教相廃立（總勘文抄）
さんぜしよぶつそうかんもんきようそうはいりゆう そうかんもんしやう

信仰者の姿勢
しんこうしや しせい
721 ページ 14 行

「共」の一字は、日蓮に共する時は宝所に至るべし。不共

ならば阿鼻大城に墮つべし

(095 御義口伝

信仰者の姿勢
1024 ページ 8 行

これに随したがい喜よろこぶを、「随喜ずいき」とは云いうなり。総そうじて
「随ずい」とは、信しんの異名いみようなり云々。ただ信心しんじんのことを、
「随ずい」と云いうなり。

（095 御義口伝 おんぎくでん）

信仰者しんこうしゃの姿勢しせい
1061 ページ 15 行

ほとけと

い

しつぽう

さんぜんだいせんせかい

しみ

仏説いて云わく「七宝をもつて三千大千世界に布き満つ

て　こゆび

ぶつきよう　くよう

るとも、手の小指をもつて仏経に供養せんにはしかず」

しゆい

取意。

せつせんどうじ

み　投

ぎようぼうぼんじ

み　かわ　剥

雪山童子の身をなげし、樂法梵志が身の皮をはぎし、

しんみよう

す

お

ふせ

身命に過ぎたる惜しきもののなければ、これを布施とし

ぶつぽう　なら

かなら　ほとけ

成

しんみよう

す　ひと　た

て仏法を習えば必ず仏となる。身命を捨つる人、他の

たから　ぶつぽう　お

ざいほう

ぶつぽう

惜

宝を仏法に惜しむべしや。また、財宝を仏法におしまん

勝

しんみよう

す

もの、まさる身命を捨つべきや。

さどごしよ

しやくそん ほけきよう やくおうほん きん ぎん るり ななしゅるい ほうせき

釈尊は法華經の藥王品に「金・銀・瑠璃など七種類の宝石を

さんぜんだいせんせかい し くよう て こゆび ぶつぽう

三千大千世界に敷きつめて供養したとしても、手の小指を仏法に

くよう いみ せつせん

供養することにおよばない」という意味のことをのべています。雪山

どうじ おに み な ぶつぽう ぎようぼうほんじ み

童子は鬼に身を投げあたえて仏法をもとめました。樂法梵志は身の

かわ きよう か うつ せいめい とうと

皮をはいで經を書き写したといひます。生命より尊いものはない

せいめい ほどこ ぶつぽう まな

のですから、この生命を施して仏法を学ぶならば、かならず

じようぶつ せいめい す けつい

成仏することができます。生命を捨てようという決意ができてゐる

ひと ほか たから ぶつぽう お ざいほう

人が、他の宝を仏法のために惜しむでしようか。また、財宝を

ぶつぽう

お

ひと

いじょう

とうと

せいめい

す

仏法のために惜しむような人が、それ以上に尊い生命を捨てること
とができるでしょうか（そんなはずはありません）。

これはさて置きぬ。置 日蓮を信ずるようなりし者どもが、にちれん しん もの

日蓮がかくなれば、疑いをおこして法華経をすつるのみ。にちれん うたが 起 ほけきよう 捨

ならず、かえりて日蓮を教訓して我賢しと思わん僻人。にちれん きようくん われかしこ おも びやくにん

等が、念仏者よりも久しく阿鼻地獄にあらんこと、不便と。とう なんぶつしゃ ひさ あびじごく ふびん

も申すばかりなし。もう

修羅が「仏は十八界、我は十九界」と云い、外道が云。しゆら ほとけ じゅうはつかい われ じゅうくかい い げどう い

わく「仏は一究竟道、我は九十五究竟道」と云いしがこ。ほとけ いちくきようどう われ くじゅうごくきようどう い

とく、「日蓮御房は師匠にてはおわせども余りにこわし。にちれんごぼう ししよう あま 強

我らはやわらかに法華経を弘むべし」と云わんは、螢火が。われ 柔 ほけきよう ひろ い ほたるび

にちがつ 笑

ありづか かざん くだ

せいこう かかい 侮

日月をわらい、蟻塚が華山を下し、井江が河海をあなず

かささぎ らんほう 笑

り、烏鵲が鸞鳳をわらうなるべし、わらうなるべし。

(122 佐渡御書

さどごしよ

しんこうしや しせい
信仰者の姿勢 1291 ページ 3 行)

にちれん しん たいど

これらの人びとのことはさておき、日蓮を信ずるような態度をとつ

ひと にちれん

ていた人たちが、日蓮がこのようになると (佐渡流罪になつたこ

うたが ほけきよう す たいてん

さどるざい

と)、疑いをおこして法華経を捨て退転するだけでなく、かえつて

にちれん きようくん じぶん おも こころ ひと

日蓮を教訓して、自分がかしこいと思つている心のひがんだ人た

ねんぶつしや なが あいだむげんじごく じゅう

ちが、念仏者よりもさらに長い間無間地獄に住しているであろう

いがい

ぞうじようまん

しゆら

ことは、かわいそうという以外にありません。増上慢の修羅が

ほとけ

さと

ろっこん

ろつきよう

ろくしき

じゆうはつかい

じぶん

さと

「仏の悟りは六根、六堺、六識の十八界であるが、自分の悟

ひと

おお

じゆうきゆうかい

げどう

ほとけ

さと

りはそれより一つ多い十九界である」といい、外道が「仏の悟

いちぶつじよう

ひと

じぶん

きゆうじゆうごしゆ

さと

りは一仏乗の一つしかないが、自分は九十五種の悟りがある」

にちれんごぼう

ししよう

しゃくぶく

つよ

といったように、「日蓮御房は師匠ではあるが、あまりに折伏が強

ほけきよう

ひろ

すぎる。われわれはやわからかに法華経を弘めよう」などというのは、

ほたる

ひ

たいよう

つき

わら

ちい

ありづか

かざん

いど

螢の火が太陽や月を笑い、小さな蟻塚が華山をみくだし、井戸や

ちい

かわ

たいが

うみ

らんほう

とり

おう

小さな川が、大河や海をあなどり、かささがが鸞凰（鳥の王）をあ

ざわらうようなものです。

めみようぼさつ ひがしいんど ひと ふほうぞう だいじゅうさん つら もと

馬鳴菩薩は東印度の人、付法蔵の第十三に列なれり。本

げどう おさ とき ろくびく ないげ じゃしよう ろん

外道の長たりし時、勒比丘と内外の邪正を論ずるに、そ

こころげんか と じゅうか しゃ みずか こうべ

の心言下に解けて、重科を遮せんがために、自らの頭

は ぎ い われ われ てき だごく

を刎ねんと擬す。謂うところは「我、我に敵して墮獄せし

ろくびく いさ とど い なんじ こうべ き

めん」。勒比丘、諫め止めて云わく「汝、頭を切ること

こうべ うち だいじょう さんたん

なかれ。その頭と口とをもつて大乘を讃歎せよ」。

おおたにゆうどうどのごへんじ

151 太田入道殿御返事

しんこうしゃ しせい

信仰者の姿勢 1361 ページ 4 行

そうべつ にぎ

そうべつ にぎすこ

あい 背

じょうぶつおも

総別の二義あり。総別の二義少しも相そむけば、成仏思

りんねしょうじ 基

いもよらず。輪廻生死のもといたらん。

そやどのごへんじ じょうぶつようじんしょう

165 曾谷殿御返事（成仏用心抄）

しんこうしや しせい

信仰者の姿勢 1434 ページ 4 行

だいしょうにん ぶつぼう

そうべつ にぎ

そうべつ ふた

（大聖人の仏法には）総別の二義があります。この総別の二つ

いぎ すこ そむ じょうぶつ おも

の意義について少しでも背けば成仏することは思いもありません

ろくどう くる りんね げんいん

し、六道の苦しみを輪廻する原因となつ

てしまふのです。

ほけきよう　たいかい　ちえ　みず　う　こんげん　し　わす　よそ
法華經の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて、余

こころ

移

かなら

りんねしょうじ

禍

へ心をうつさば、必ず輪廻生死のわざわいなるべし。

そやどのごへんじ　じょうぶつようじんしょう

165 曾谷殿御返事（成仏用心抄）

しんこうしや　しせい

信仰者の姿勢 1434 ページ 8 行

ほけきよう　　ともしび

法華経は 灯のごとく、行者は油のごとし。

ぎようじや　あぶら

だんな　あぶら

のごとく、行者は 灯のごとし。

ぎようじや　　ともしび

（167 曾谷殿御返事（輪陀王の事）

そやどのごへんじ　　りんだおう　　こと

信仰者の姿勢 1439 ページ 14 行

しんこうしや　しせい

ほけきよう　　ともしび

法華経は 燈のようなものであり、行者は油のような

ぎようじや　あぶら

だんな　あぶら

ものです。檀那は油のようなものであり、行者は燈の

かんけい

ような関係にあります。

ぎようじや　　ともしび

しだん
師檀となることは三世の契り、種・熟・脱の三益別に人
もと
を求めんや。

あきもとどのこへんじ
(169 秋元殿御返事

しんこうしや しせい
信仰者の姿勢
1456 ページ 9 行

うつわ よつ とが いち ふく もう 覆
器に四つの失あり。一には覆と申して、うつぶけるな

り、またはくつがえす、または蓋をおおうなり。二には漏
ろ

と申して、水もるなり。三には汚と申して、けがれたるな
汚

り。水浄けれども、糞の入りたる器の水をば用いること
みずきよ ふん い うつわ みず もち

なし。四には雑なり。飯に、あるいは糞、あるいは石、あ
し ぞう はん ふん いし

るいは沙、あるいは土ななどを雑えぬれば、人食らうこと
すな ども まじ ひとく

なし。

うつわ われ しんしん あらわ われ こころ うつわ くち
器は我らが身心を表す。我らが心は器のごとし。口

も器、耳も器なり。

(
170 秋元御書 あきもとごしよ

信仰者の姿勢 しんこうしやしせい
1457 ページ 11 行

たとい煩いかなるわずらわしきことありとも、夢ゆめになして、

ほけきよう

捌

たも

ただ法華經のきようだいしことのしみさばくらせ給うべし。

171 兄弟抄

しんこうしや

しせい

信仰者の姿勢

1481

ページー3行

わずら

ゆめ

たとえ、どのようなおも煩わしいことがあつても、夢のなかのことと

ほけきよう

おも

して、ただ法華經のことだけを思つていきなさい。

ごうじよう だいしんりき

出

ほつけしゅう

しじょうきんご

しじょうきん

強盛の大信力をいだして、「法華宗の四条金吾、四条金

ご

かまくらじゅう

じょうげばんにん

ないしにほんこく

いつさいしゅじよう

くち

吾」と、鎌倉中の上下万人、乃至日本国の一切衆生の口

謳

たま

悪

な

なが

善

な

にうたわれ給え。あしき名さえ流す。いわんやよき名を

ほけきよう

な

や。いかにいわんや法華経ゆえの名をや。

しじょうきんごどのごへんじ

ぼんのうそくぼだい

こと

（194 四条金吾殿御返事（煩惱即菩提の事）

しんこうしや

しせい

信仰者の姿勢

1522 ページ 13 行

つよ しんじん

ほつけしゅう

しじょうきんご

しじょうきんご

強い信心をおこして、法華宗の四条金吾、四条金吾と、

かまくらじゅう じょうげ

ひと

にほんじゅう

ひと

鎌倉中の上下のあらゆる人びと、そして日本中のすべての人たち

かた

ひと

あくめい

なが

よ

に語られていきなさい。人は悪名でさえ流すものです。まして善い

な　なが

とうぜん

名を流すのは当然のことです。ましてや法華經のゆえの名においては

ほけきよう

な

いうまでもありません。

いっさい

ひと

憎

しやかぶつ

たほうぶつ

じつぽう

一切の人はにくまばにくめ、釈迦仏・多宝仏・十方の

しよぶつ

ないしほんのう

たいしやく

にちがつとう

不便

思

諸仏、乃至梵王・帝釈・日月等にだにもふびんとおもわ

苦

ほけきよう

褒

れまいらせなば、なにくるし。法華經にだにもほめられた

てまつりなば、なにかくるしかるべき。

しじょうきんごどののにようぼうごへんじ

（198 四条金吾殿女房御返事

しんこうしや

しせい

信仰者の姿勢

1542 ページー16行

ひと にく

しやかぶつ

たほうぶつ

じつぽう

しよぶつ

あらゆる人に憎まれても、釈迦仏、多宝仏、十方の諸仏や

だいぼんてんのう

たいしやくてん

につてん

がつてんとう

おも

大梵天王、帝釈天、日天、月天等にかわいそうだと思われるな

にに

ふそく

ほけきよう

ごほんぞん

らば、何の不足がありましたしょうか。ましてや法華經（御本尊）にほめ

られるならば、

何なにの不足ふそくがあるでしょうか。

しよりよう

召

おい

たも

じゅうらせつによ

たとい所領をめされ追い出だし給うとも、十羅刹女の

おんはか

深

恃

たも

御計らいにてぞあるらんとふかくたのませ給うべし。

しじようきんごどのごへんじ

ふかしやくしよりよう

こと

(208 四条金吾殿御返事 (不可惜所領の事))

しんこうしや

しせい

信仰者の姿勢

1583

ページー13行

ほうもん

付

ひと 数

多

そうら

公

この法門につきし人あまた候いしかども、おおやけ・

私

だいなんたびたびかさ

そうら

いちねんにねん

付

わたくしの大難度々重なり候いしかば、一年二年こそつ

そうら

のちのち

みな

落

き候いしが、後々には、皆、あるいはおち、あるいは

返

や

射

み

こころ

かえり矢をいる。あるいは身はおちねども心おち、ある

こころ

み

いは心はおちねども身はおちぬ。

(218 四条金吾殿御返事 (源遠流長の事))

しじょうきんごどのごへんじ

げんおんりゆうちよう

こと

しんこうしや

しせい

信仰者の姿勢

1615

ページー8行)

こ じぶつどう

ほうもんもう

めんぼく

書

「御持仏堂にて法門申したりしが面目」なんどかかれて

そうろう

ふしぎ

覚

そうろう

候こと、かえすがえす不思議におぼえ候。そのゆえ

そう

うえいちえんぶだい

有

難

ほうもん

は、僧となりぬ、その上一閻浮提にありがたき法門なるべ

とうがく

ぼさつ

思

し。たとい等覺の菩薩なりとも、なにとかおもうべき。ま

ぼんてん

たいしやくとう

われ

しんぷ

しやかによらい

ごしよりよう

して梵天・帝釈等は、我らが親父・釈迦如来の御所領を

預

しようほう

そう

やしな

もの

付

そうろう

あずかりて、正法の僧を養うべき者につけられて候。

びしやもんとう

してんげ

しゅ

かど守

ししゅう

おう

毘沙門等は四天下の主、これらが門まぼり、また四州の王

とう びしやもんてん

しよじゅう

うえ

やまとあきつしま

等は毘沙門天が所従なるべし。その上、日本秋津島は

ししゅう

りんおう

しよじゅう

およ

しま

おさ

おさ

四州の輪王の所従にも及ばず、ただ島の長なるべし。長

なんどにつかえん者どもに「召されたり」「上」なんどか

うえ

めんぼく

もう

詮

仕

もの

め

かみ

書

く上、「面目」なんど申すは、かたがたせんずるところ

にちれん

卑

書

そう

にちれん

でし

きよう

日蓮をいやしみてかけるか。総じて、日蓮が弟子は、京

上

はじ

忘

のち

てんま付

にのぼりぬれば、始めはわすれぬようにて、後には天魔つ

もの

狂

少

輔ぼう

和
ごぼう

体

きて物にくるう。しよう房がごとし。わ御房もそれていに

てん

憎

被

上

幾

なりて、天のにくまれかぼるな。のぼりていくばくもなき

じつみよう

変

条

もの
狂

さだ

言
葉
付

に、実名をかうるじよう、物ぐるわし。定めてことばつ

おと

きよう

鼠

き、音なんども京なめりになりたるらん。ねずみが

蝙蝠

蝙蝠

とり

鼠

かわほりになりたるように、鳥にもあらず、ねずみにもあ

いなかほつし

きようほつし

似

少 輔 ぼう

らず、田舎法師にもあらず、京法師にもにず。しよう房

覚

ことば

田 舎

がようになりぬとおぼゆ。言をば、ただいなかことばに

悪

あ

そんじよう

てあるべし。なかなかあしきようにて有るなり。「尊成」

書

お き ほうおう

ごじつみよう

ふ し ぎ

とかけるは、隠岐法皇の御実名か。かたがた不思議なるべ

し。

237

法門申さるべき様の事

ほうもんもう

よう

こと

信仰者の姿勢

しんこうしや

しせい

1657

ページー7行

こおり みず い みず 凄 あお

氷は水より出でたれども、水よりもすさまじ。青きこと

あい い 重 あい いろ 勝

は藍より出でたれども、かさぬれば藍よりも色まさる。

おとごぜんごしようそく

(242 乙御前御消息

しんこうしや しせい

信仰者の姿勢 1690 ページ 13 行)

こおり みず こおり つめ あお いろ

氷は水からできたものですが氷よりもなお冷たくなり、青い色

あい う で いろ かさ あい いろ こ

は藍から生まれ出たものですが色を重ねると藍よりも色が濃くなる

のです。

ほけきよう たも しん

法華經を持ち信ずれども、誠に色心相応の信者、

のうじしきよう ぎようじや 希

能持此經の行者はまれなり。

(262 阿仏房尼御前御返事

あぶつぼうのあまごぜんごへんじ

しんこうしや しせい

信仰者の姿勢

1729 ページー10 行)

この法門を申し始めしより、命をば法華經に奉り、名
をば十方世界の諸仏の浄土にながすべしと思ひ儲けしな
り。

271 一谷入道御書

いちのさわのにゆうどうごしよ

信仰者の姿勢 1758 ページ 15 行

しんこうしや しせい

にちれん しん はじ そうら ひ まいにち かんもん じゆ

日蓮も信じ始め候いし日より、毎日これらの勘文を誦し

そうら ぶつてん きせい そうろう しゆじゆ だいなん あ

候いて、仏天に祈誓し候によりて、種々の大難に遇う

ほけきよう くりき しゃくそん きんげん じんじゆう ゆえ

といえども、法華經の功力、釈尊の金言、深重なる故

いま そういな そうろう

に、今まで相違無く候なり。

ほけきよう ぎようじや しんじん たいてんな

それにつけても、法華經の行者は、信心に退転無く、

み さしんな いっさいほけきよう み まか きんげん

身に詐親無く、一切法華經にその身を任せて金言のごとく

しゆぎよう ごしよう もう およ こんじよう そくさい

修行せば、たしかに後生は申すに及ばず、今生も息災

えんめい しょうみよう だいかほう え こうせんる ふ だいがん

延命にして勝妙の大果報を得、広宣流布の大願をも

じようじゆ

成就すべきなり。

279 祈禱經送状

しんこうしや しせい

信仰者の姿勢 1786 ページ 12 行

にちれん ほけきよう しんじん はじ ひ まいにち ほけきよう かん

日蓮も法華經の信心を始めた日から、毎日これらの法華經の勘

もん にちれんだいしようにん だ ようもん どくじゆ ほとけ してん

文（日蓮大聖人がぬき出された要文）を讀誦し、仏や諸天に

いの しゆじゆ だいなん ほけきよう くどく

祈つてきたので、種々の大難にあつたけれども、法華經の功德が

いだい しやくそん ことば ただ いま ぶじ す

偉大であり、釈尊の言葉が正しいがゆえに、今まで無事に過ぐすこ

ほけきよう ぎようじや しんじん たいてん

とができたのです。それにつけても、法華經の行者は信心に退轉

み いっわ ごほんぞん み まか ほとけ ことば

なく、身に偽りなく、すべて御本尊にその身を任せて、仏の言葉

しゆぎよう べししよう

どおりに修行するならば、かならずや後生はもちろんのこと、

こんじよう

わざわ

じゆみよう

の

くどく

今生においても災いをやめ、寿命を延ばして、すばらしい功德

え

こうせんるふ

おお

ねが

じようじゆ

を得ることができ、広宣流布という大きな願いをも成就すること

ができるのです。

とうせい

しょうぞうにせんねん 過

まつぼう

い

しかるに、当世は、正像二千年すぎて末法に入つて

にひやくよねん

けんじよく

盛

あく

ぜんこん

おお

二百余年、見濁さかりにして、悪よりも善根にて多く

あくどう

お

じこく

あく

ぐち

ひと

あく

知

悪道に墮つべき時刻なり。悪は、愚癡の人悪とすれば、

従

へん

ひ

みず

消

ぜん

したがわぬ辺もあり。火を水をもつてけすがごとし。善

ぜん

おも

しょうぜん

つ

だいあく

お

は、ただ善と思うほどに、小善に付いて大悪の起こるこ

知

とをしらず。

なんじようひようえしちろうどのごしよ

(296 南条兵衛七郎殿御書

しんこうしや

しせい

信仰者の姿勢

1827

ページー8 行)

なにごと

ことば

和

ほけきよう

しん

薄

何事につけても、言をやわらげて法華經の信をうすくな

様

謀

ひとしゅつたい

わ

しんじん

試

さんずるようをたばかり人出来せば、我が信心をこころ

思

おのおの

ご

教

訓

むるかとおぼして、「各々、これを御きようくんあるは

嬉

おんみ

教

訓

たま

うれしきことなり。ただし、御身をきようくんせさせ給

かみ

ごしんよう 無

知

そうろう

かみ

え。上の御信用なきことはこれにもしりて候を、上をも

脅

たも

そうら

まい

教

訓

つておどさせ給うこそおかしく候え。参つてきようくん

もう

思

そうら

上 手 打

申さんとおもい候いつるに、うわてうたれまいらせて

そうろう

えんまおう

わ

み

愛

思

おん妻

こ

候。閻魔王に、我が身といとおしとおぼす御めと子との

引

張

とき

ときみつ

て

擦

たま

そうら

ひっぱられん時は、時光に手をやすらせ給い候わんずら

ん」と、にくげにうちいいておわすべし。

憎

打

言

311 上野殿御返事（梵帝御計らいの事）

うえのどのごへんじ

ぼんたいおんはか

こと

信仰者の姿勢

しんこうしや

しせい

1867

ペー
16行

せんちようまんちよう 領 ひと

千丁万丁しる人も、わずかのことにたちまちに命をす

いのち 捨

しよりよう 召

て、所領をめさるる人もあり。今度、法華経のために命

ひと

こんど ほけきよう

いのち

をすつることならば、なにはおしかるべき。

惜

311 上野殿御返事 (梵帝御計らいの事)

うえのどのごへんじ

ぼんたいおんはか

こと

しんこうしや しせい

信仰者の姿勢 1868 ペー 8 行

1868

にちれん

でしとう

なか

ほうもん 知

そうろうひとびと

日蓮が弟子等の中に、なかなか法門しりたりげに候人々

悪

そうろう

そうろう

は、あしく候げに候。

315 上野殿御返事（末法要法の事）

うえのどのごへんじ

まっぼうようほう

こと

しんこうしや しせい

信仰者の姿勢

1874

ページー10 行

うえ

しょうごう

多

くじ責

当

その上、わずかの小郷におおくの公事せめあてられて、

み

乗

うま

さいし

引

掛

ころも

わが身はのるべき馬なし、妻子はひきかくべき衣なし。

み

ほけきよう

ぎようじや

さんちゆう

ゆき

責

かかる身なれども、法華經の行者の山中の雪にせめら

じき 乏

思

たま

錢

いっかん

れ、食ともしかるらんとおもいやらせ給いて、ぜに一貫

送

たま

ひんによ

妻

夫

ふたり

ひと

ころも

おくらせ給えるは、貧女がめおとこ二人して一つの衣を

着

こつじき

与

利 咤

ごうし

なか

稗

きたりしを乞食にあたえ、りたが合子の中なりしひえを

びやくしぶつ

与

尊

辟支仏にあたえたりしがごとし。とうとし、とうとし。

うえのどのへんじ

すだつちようじやごしよ

337 上野殿御返事 (須達長者御書)

しんこうしや

しせい

信仰者の姿勢 1919 ページ 11 行

りようち

おも ぜい

そのうえ、わずかの領地なのに、そこへいろいろと重い税をかけ

じぶん の うま つま こ き いふく

られて、自分の乗る馬もなく、妻や子どもは着る衣服もないほどで

み ほけきよう ぎようじや みのぶ やま なか ゆき

す。そのような身でありながら、法華經の行者が身延の山の中で雪

せ た もの おも ぜにいつかんもん

に責められて、食べ物もとぼしいだろうという思いから、錢一貫文

おく まず ふじん ふうふふたり いちまい

をわざわざ送ってくださったことは、貧しい婦人が夫婦二人で一枚

きもの き こじき ぎようじや ほどこ りだ

の着物を着ていたのを、乞食の行者に施してあげたことや、利咤

しよつき なか ひえ びやくしぶつ くよう に

が食器の中にある稗を辟支仏に供養したことと似ています。まこと

とうと

に尊いことです。

須利槃特

さんかねん　じゅうしじ　そら

すりはんどくは、三箇年に十四字を暗にせざりしかども、

ほとけ　な　だいば　ろくまんぞう　そら　むけん　お

仏に成りぬ。提婆は、六万歳を暗にして無間に堕ちぬ。

まつだい　いま　よ　ひよう　ひと　うえ

これひとえに末代の今の世を表するなり。あえて人の上

おぼ

と思しめすべからず。

(352 三三蔵祈雨事

さんさんぞうきうのこと

しんこうしや　しせい

信仰者の姿勢

1945 ページ 11 行)

かこ ふきようぼさつ いっさいしゅじよう ぶつしよう ほけきよう たも

過去の不輕菩薩は、「一切衆生に仏性あり。法華經を持

かなら じようぶつ かれ かる ほとけ かる

てば必ず成仏すべし。彼を輕んじては仏を輕んずるに

らいはい ぎよう た たま

なるべし」とて、礼拝の行をば立てさせ給いしなり。

ほけきよう たも もの たも

法華經を持たざる者をさえ、「もし持ちやせんずらん、

ぶつしよう らいはい たも

仏性あり」とて、かくのごとく礼拝し給う。いかにいわ

たも ざいけ しゅつけ もの

んや、持てる在家・出家の者をや。

まつのどのごへんじ じゅうしひぼう こと

374 松野殿御返事（十四誹謗の事）

しんこうしや しせい

信仰者の姿勢 1987 ページ17行

きちく

ほけきよう

いちげいつく

と

もの

いかなる鬼畜なりとも法華經の一偈一句をも説かん者をば

まさ

た

とお

むか

まさ

ほとけ

うやま

「当に起つて遠く迎うべきこと、当に仏を敬うがごとく

どうり

ほとけ

たが

うやま

すべし」の道理なれば、仏のごとく互いに敬うべし。

まつのどのごへんじ

じゅうしひぼう

こと

374 松野殿御返事（十四誹謗の事）

しんこうしや

しせい

信仰者の姿勢

1989

ページー2行

ざいけ おんみ

よねん

なんみようほうれんげきよう

おんとな

在家の御身は、ただ余念なく南無妙法蓮華經と御唱えあり

そう

くよう

たも

かんじん

そうろう

て、僧をも供養し給うが肝心にて候なり。それも、

きようもん

ずいきえんぜつ

あ

經文のごとくならば、随力演説も有るべきか。

まつのどのごへんじ

じゅうしひぼう

こと

374 松野殿御返事（十四誹謗の事）

しんこうしや

しせい

信仰者の姿勢

1994

ページー3行

内 房

おんこと

おん 年 寄

たま

おん 渡

うつぶさの御事は、御としよらせ給いて御わたりありし、

勞

思

そうら

氏 神

いたわしくおもいまいらせ候いしかども、「うじがみへ

詣

序

そうら

見 参 い

まいりであるついで」と候いしかば、げんざんに入るな

さだ

罪 深

ゆえ

かみ しよじゆう

らば定めてつみふかかるべし。その故は、神は所従な

ほけきよう

しゆくん

しよじゆう

序

しゆくん

り、法華経は主君なり。所従のついでに主君への

見

参

せけん

恐

そうろう

うえ

あま おんみ

げんざんは世間にもおそれ候。その上、尼の御身になり

たま

ほとけ

先

おん 失

給いては、まず仏をさきとすべし。かたがたの御とがあ

見

参

そうろう

あま 御 前 ひとり

りしかば、げんざんせず候。これまた尼ごぜん一人には

限

ほか

ひとびと

下 部 湯

序

もう

かぎらず、その外の人々も、「しもべのゆのついで」と申

もの 数 多 追 返 そうろう あま 親
す者をあまたおいかえして候。尼ごぜんは、おやのごと
おん 年 おん 歎 労 そうら
くの御としなり。御なげき、いたわしく候いしかども、
ぎ 知
この義をしらせまいらせんためなり。

385
（三沢抄）
みさわしやう

しんこうしや しせい
信仰者の姿勢
2014 ページー5 行

おのれ こころ もと 拙 こころ

己が心は本よりつたなき心なれば、はかばかしきことなし。

ほけきよう もう ずいじい もう ほとけ みこころ 説

法華経と申すは、随自意と申して、仏の御心をとかせ

たも ほとけ みこころ 善 こころ 知 ひと

給う。仏の御心はよき心なるゆえに、たといしらざる人

きよう 読 りやく 量

も、この経をよみたてまつれば利益はかりなし。麻の中

蓬 筒 なか 蛇 善 ひと 睦 者

のよもぎ、つつの中こころのくちなわ、よき人にむつぶもの、な

こころ 振 舞 ことば 直

にとなけれども心もふるまいも言もなおしくなるなり。

ほけきよう 何 きよう しん

法華経もかくのごとし。なにとなけれどもこの経を信じ

ひと ほとけ 善 思

ぬる人をば、仏のよきものとおぼすなり。

（
393

衆生身心御書

しゅじょうしんしんごしよ

信仰者の姿勢

しんこうしや

しせい

2040

ページー14行

まつぼうる ふ う

われ

うれしきかな、末法流布に生まれあえる我ら。かなしきか

こんど

きよう しん

ひとびと

にんかい しょう

な、今度この経を信ぜざる人々。そもそも、人界に生を

う 者

たれ むじよう まぬか

受くるもの、誰か無常を免れん。さあらんにとつては、

なん ごせ

勤

何ぞ後世のつとめをいたさざらんや。

にいけごしよ

(400 新池御書

しんこうしや しせい

信仰者の姿勢

2062

ページー6行)

まつぼう みようほう ひろ

う

うれしいことです。末法に妙法が広まっていくときに生まれあわ

わたし

ふくうん

かな

いま

せた私たちのなんと福運のあることよ。悲しいことです。今この

きよう ごほんぞん

しん

ひと

にんげん

よ

経（御本尊）を信じられない人びとは。およそ人間としてこの世に

せい　う　ひと　だれひとり　むじょう　し

生を受けた人は、誰一人として無常（死）からまぬかれることはで

しんじん　こうせい　ぶつどうしゆぎよう

きません。ですから、信心をとって後世のために仏道修行をする

べきではないでしょうか。

い や も の
賤しき者なりとも、この経の謂れを知りたらんものを
し ょ う じ ん に よ ら い
ば、生身の如来のごとくに礼拝・供養すべし。これ経文
き ょ う も ん
な り

（
400
新池御書
に い け ご し ょ

し ん こ う し ゃ し せ い
信仰者の姿勢
2065
ページー4行

かま かま しよりよう お さいし かえり ひと たの
構えて構えて、所領を惜しみ、妻子を顧み、また人を憑

危
んであやぶむことなかれ。

おも き ことし せけん かがみ
ただひとえに思い切るべし。今年の世間を鏡とせよ。

ひと し いま い あ
そこばくの人の死ぬるに、今まで生きて有りつるは、この

遭
ことにあわんためなりけり。これこそ宇治川を渡せし所

せた わた ところ な あ な
よ。これこそ勢多を渡せし所よ。名を揚ぐるか、名を

下
くだすかなり。

404 やさぶろうごの「へんじ」
弥三郎殿御返事

しんこうしや しせい
信仰者の姿勢
2085 ページー6行

こころ

りょうち

ざいさん

お

つま

こ

こころ

心して領地（財産）を惜しんだり、妻や子を心にかけてたり、ま

たにん

たの

おそ

あや

こころ

た他人を頼みにしたりして、恐れ危ぶむ心をもつてはなりません。

かくご

かた

けつじよう

しんじん

と

く

ただひとえに覚悟を固めて決定して信心と取り組んでいきなさい。

ことし

せけん

ようそう

かがみ

おお

ひと

し

今年の世間の様相を鏡としていきなさい。多くの人が死んでいくな

いま

い

じゅうだいじ

かで、今まで生きてこられたのは、この重大事にあわれるためだつ

いま

しょうぶ

けつ

うじかわ

わた

せた

たのです。今こそ、勝負を決する宇治川を渡るところであり、勢多

わた

か

な

ま

な

くだ

を渡るところなのです。勝つて名をあげるか、負けて名を下すかの

さかい

堺です。